

NEXT CONCERTS

>> 次回東京定期演奏会

第785回東京定期演奏会

2026年 11月13日(金) 19:00開演
11月14日(土) 14:00開演
サントリーホール

プレトーク 萩谷 由喜子氏

金曜日/18:30~
土曜日/13:20~

■1回券料金

S ¥10,000 A ¥8,500 B ¥7,500 C 完売 P ¥5,000 Ys (25歳以下) ¥2,500

※障害者手帳をお持ちの方は割引がございますので、サービスセンターにお問い合わせください。

助成:



文化庁文化芸術振興費補助金
(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動))
独立行政法人日本芸術文化振興会

小林研一郎が描く 《我が祖国》の風景 ——魂を揺さぶる音楽の旅

スメタナ:
連作交響詩《我が祖国》



©山本 倫子

指揮:小林研一郎[桂冠名誉指揮者]

次回東京定期演奏会指揮者にインタビュー!

小林 研一郎編

きき手 伊熊 よし子

[スメタナが全人生を懸けて書いた息を呑むような《我が祖国》は、神さまからの光のような存在だと思っています]

マエストロ小林研一郎にとってスメタナの《我が祖国》は、生涯忘れえぬ強烈な思い出の作品として脳裏に深く刻み込まれている。今回70周年を迎える日本フィルとともにこの名曲(全6曲)を演奏し、聴衆をチェコの激動の歴史とともにその美しい景観の地へとといざない、「コバケン」の《我が祖国》を表現する。

コバケンさんは2002年5月12日、「プラハの春音楽祭」のオープニングコンサートで東洋人として初めてチェコ・フィルハーモニー管弦楽団を指揮して《我が祖国》を全

曲演奏するという栄誉に浴した。チェコ人以外の指揮者がチェコ・フィルと《我が祖国》を演奏・録音するのは非常に稀で、伝統あるオーケストラと見事に融合し、新たな視点をも加え、演奏は大成功を博した。しかし、最初からチェコ・フィルと意気投合したわけではなく、紆余曲折の末、名ライブが誕生したのである。

「僕にとってスメタナはロマン派の偉大な作曲家ですので、その思いで指揮したい。でも、チェコ・フィルにとってこの作品はバイブルのような存在。2曲目の《ヴァルタヴァ(モルダウ)》には戦争による赤い血が流れているといい、単にきれいな音では演奏できないという。僕がうれしそうに、美しい音で演奏するのは間違っているのではないかと いわれた。そうした解釈の違いがあり、僕はリハの途中でホテルに帰っちゃったんです。すると僕の気持ちが少し落ち着いて怒りが冷めたころ、夜中にチェコ・フィルの10人がやってきて謝罪したいという。それで翌日から思いを分かち合いながらいい音楽を作ろうと精一杯努力し、本番に臨んだのです」

第1曲「ヴィシェフラド」は「高い城」を意味し、スメタナの墓地がある場所である。

「このときにはお墓に詣でて、自分なりの解釈ですが最高の演奏をしますと誓いました。冒頭の2台のハープが高い城から射してくる光を表し、とても印象的に始まります。ここから源流となって流れていくヴァルタヴァ川を表す第2曲が続きます。これは単独でもよく演奏される、非常に美しい心に響く旋律を備えた作品です。最初にチェコ・フィルの本拠地であるヴァルタヴァ川のほとりにあるルドルフィナム(芸術家の家)のドヴォルザーク・ホールでオーケストラの響きを聴いたときは、「虹のような音」だと思って感極まりました。ホールがオーケストラを育てるといいますが、まさにルドルフィナムが、チェコ・フィルの心のなかに直接入ってくる直截的な響きを育てたのだと思いました。それを最大限生かしながら、《シャルカ》は男女の闘いのほげしさを、《ボヘミアの森と草原から》はうっそうとした森と広大な草原が想像できるように、そして《ターバル》と《ブラニーク》はフス教徒の戦いと農民の踊りや祈りの情景、歓びの歌などさまざまなものが混在しているため、それらを描き出せるように各楽器の特質を生かしながらいねいに演奏していきます。僕がいつも感じていることですが、舞踊のリズムが出てきたときは、オーケストラも心身を揺らす思いで演奏してほしいのです。実は、クライマックスに大太鼓をプラスしたりフィナーレのコーダを多少変えたりしています。スメタナが全人生を懸けて書いた息を呑むようなこの作品は、神さまからの光のような存在だと思っているため、連作の最後を飾るフィナーレは印象に残る分厚い響きにしたいわけです。最後の30秒ですね。今回も日本フィルとそうように演奏したいと思います」

コバケンさんのスメタナに対する思いは深く熱い。その後チェコ・フィルとは数えきれないほど共演を重ね、いまでは同志のよう。彼の「我が祖国」は聴き手をプラハの地へとといざない、スメタナの魂を代弁する。その熱き思いを全身で受け取り、かの地へと飛翔したい。